

機関リポジリとは？

大手出版社による学術情報支配から脱却するための方策である機関リポジリについて説明します。

学術コミュニケーション変革の動き

電子資料の中心的なものとして先に商業出版社のEJの購読について触れましたが、その発想を転換するような動きも出てきています。自館発の電子資料を作成し提供しようという機関リポジリ (Institutional Repository、省略してIRと呼ばれています) という考え方です。

現在の学術情報流通は大手商業出版社に支配されている状況です。学術雑誌に論文を掲載している先生方は、出版社に投稿料を払った上で、各大学でさらにその雑誌を機関購読しています。こういう仕組みが学術コミュニケーションの世界を支えてきたのですが、その機関購読料金の高騰が続くと反発も出てきます。この出版社の支配から脱却するための方策として、出てきたのがSPARCという事業やオープン・アク

セス雑誌(無料でアクセス可能なEJ)の出現ですが、それよりもっと手軽に各大学で始められるのが、各大学に所蔵する教員の業績を全文DB化しようという機関リポジリの考え方です。

機関リポジリのメリット

これは「各大学独自のオンラインコレクション」「研究成果のショーウィンドウ」と言えます。各大学の機関リポジリ・サーバにメタデータ付きで電子化した論文などを登録することによって、全世界からその論文が検索されるようになります。通常のインターネットのサーチエンジンにいろいろな情報がひっかかってくるように各論文のネット上への露出が増え、引用される可能性が高くなります。このことにより、

- ① 研究成果の視認性のアップ
- ② 大学が社会に対する説明責任を

果たすことができる

③ 研究機関の知名度アップ

といった効果もたらされます。

さらにこのサービスで画期的なのは、従来から行われてきた各大学の紀要や学位論文の電子化に加え、先生方が商業誌に発表した論文を載せることも可能な点です。このことをセルフ・アーカイビングといいます。出版社によって対応は違いますが、欧米の大手出版社の多くは著者最終稿の掲載を認めています(そういう出版社は、色に例えて「グリーン出版社」と呼ばれています)。

つまり、この機関リポジリの考え方が浸透すれば、出版社のサイトにアクセスしなくても、同じ内容の論文を読むことができるということになります。商業出版社に独占され続けていた学術コミュニケーションの流れを研究者と図書館の手に取り戻すこと。これが機関リポジリの

JW
 Lippincott Williams & Wilkins
 JBC
 Journal of Biological Chemistry
 JCCB
 Journal of Cell Biology
 機関リポジリ (Institutional Repository)
 大学などの研究機関で生産された電子的な知的生産物を保存し、原則的に無償で発信するためのインターネット上の保存書庫。OAI-PMHとラブリットールに従ってメタデータを作成することで、サービスフロバイタと呼ばれるサーバによってメタデータを収集される(ハーベストینگと呼ぶ)、全世界に提供される。
 SdARC (Scholarly Publishing and Academic Resources Coalition)
 1980年代以降の学術雑誌の高騰(いわゆる「Serials Crisis」)問題に対抗するために、図書館側から学術情報流通に変革を起そうという試み。単純に言うところ学会等を巻き込んで安くて良質の学術雑誌を出版させ、成功させるのが目的。
 Tetradron Letters
 対抗して出版されたOrga-

目指すところです（現状ではまだ「期待を込めた長期的な観測」です）が）。

機関リポジトリの課題と可能性

ただし、問題点も沢山あります。先ほど「手軽に」と書きましたが、これは予算的な面についてです。機関リポジトリは、DSpace, EPrints

といった無料で配布されているソフトウェアをサーバー機にインストールすれば、取りあえず立ち上げることができ（ただし、現状ではソフトウェアを動かすためのプログラミング、ネットワークの設定をはじめ、図書館員が自力で行うとすればかなり専門的な知識が必要となります）。むしろ難しいのは、リポジトリにどれだけ沢山の文献を登録することができるかという点です。

「教員は論文を書いたら必ずリポジトリに論文を登録しなければなら

ない」というような登録の義務化が組織内で実現できれば素晴らしいのですが、そう簡単には行きません。メタデータは誰が登録するのか、著者最終稿は残っているのかといった問題もあります。新規サービスを組織として行なっていく前提として、大学内での合意形成を作るという大きな仕事もあります。

機関リポジトリというサービスはまだ端緒にすぎたばかりですが、大きな可能性を秘めていることも事実です。今後は、大学図書館の最重要の仕事の一つとして位置づけられていくことでしょう。いろいろな課題を抱えてはいますが、今後どのような展開を見せるか、いちばん目の離せない領域といえます。

その他、当該大学史資料、デジタル・アーカイブ（貴重コレクションや各地域独自の資料）を各大学のホームページ上で公開するケースも増

えてきています。こういった資料はそれほど利用頻度は高くありませんが、各大学独自の個性的な資産として整備されて来ています。

情報リテラシー教育の推進

以上のように各種資料の電子化が進んだ場合、従来の冊子体の利用とは違い、ある程度利用についてのノウハウが必要となります。そのノウハウには、パソコン操作法といった具体的な内容に加え、図書館を使うことのように情報収集を行うか、といったもつと本質的で基礎的な能力（リテラシー）も含まれます。図書館利用法も含め、世の中に溢れる各種情報を使っていくために必要となる基礎的な知識を情報リテラシーと呼んでいます。その教育の場として図書館が主体となって教育を行うことが定着しつつあります。

（橋 洋平）

参考文献

- 土屋俊ほか『電子ジャーナルで図書館が変わる』（情報学シリーズ6）国立情報学研究所 2003
- 根岸正光ほか『電子図書館と電子ジャーナル』（情報学シリーズ8）国立情報学研究所 2004
- 逸村裕ほか編『変わりゆく大学図書館』勁草書房 2005

DSpace
 マサチューセッツ工科大学
 とヒューレット・パッカー
 ド社が開発した機関リポジ
 トリ構築用のオープンソー
 ス・ソフトウェア。
 EPrints
 サウサンプトン大学が開発
 した機関リポジトリ構築用
 のオープンソース・ソフト
 ウェア。
 セルフ・アーカイビング
 既存の学術雑誌に発表し
 た自分の論文を機関リポジ
 トリに登録すること
 メタデータ
 データに関する構造化され
 たデータ。図書館の目録テ
 ータはその典型である。
 デジタル・アーカイブ
 一般的に公文書、古文書等
 の貴重書の中で将来の利用
 が予想されるために保存す
 るものをアーカイブと呼ぶ
 その保存をデジタル形式で
 行なう場合、こう呼ばれる
 近年はweb上で公開され
 るケースが多い。
 情報リテラシー教育
 情報活用能力を養成するた
 めの教育。情報活用能力と
 いう用語は、一九八六年の
 臨時教育審議会第二次答申
 で初めて公に使用された。